

共立女大：八幡香菜子、酒井哲也、放送大：中川芳子、○酒井豊子

目的：筆者らは、人々が服装ファッションの新旧をどのように識別しているかについて女子大生をパネラーとして調査してきた。今回はパネラーの範囲を広げ、20才代から60才代の女性をパネラーとして同様の調査を行い、年齢層による差を明らかにする。

方法：服装雑誌「装苑」の1978年から1988年の11年間の掲載記事の中から、パネラーに呈示する服装写真を選んだ。服装写真はスーツを中心に同じ年毎に2点を1組とし、11年間の中から7組を選び、1枚の紙面にランダムに配置した。これをパネラーに呈示し、年代順を判定してもらった。また、判定の手がかりとした服装の特徴について回答を求めた。

結果：7組のサンプルについて各パネラーの回答した年代順位と、正しい年代順位とに関して、Spearmanの順位相関係数を求め、パネラーの年層別に順位相関係数の平均値および分布について検討した。順位相関係数の平均値は、20才代が最も大きく、年層が高くなるほど小さくなった。20才代では、20才代前半（学生）群が20才代後半群より高い値であった。学生をパネラーとした前報の結果では、1年生（18～20才）より4年生（21～24才）の値が大きいことが明らかであり、20才代前半（学生）群が最も流行に敏感であるといえる。順位相関係数の分布は、年層が若いほどプラス側が増加し、年層が高いほど0近傍の割合が大きくなった。特に60才代では0を中心とした対称型の分布、すなわち全くランダムに順位付けた場合に近い分布を示した。人々が服装の新旧を判断する手がかりは、スカート丈が最も重要な要素で、その他フィット性、肩幅、柄、ディテールデザインや、さらに服装全体の雰囲気、モデルの表情なども判断要素とされていた。